

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第7号 花き

発行日 平成26年 9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 台風対策 排水・倒伏対策や施設の保守点検を万全に行いましょう。
- ◆ りんどう 花腐菌核病防除の徹底と、翌年に向けた収穫後管理を行いましょう。
- ◆ 小ぎく 健全な親株を確保しましょう。

りんどう

1 生育概況

晩生種は昨年に比べやや早い開花となり、出荷も終盤となっている地域が多くなっています。また、極晩生種の開花も始まっています。

病害虫では花腐菌核病の発生が始まっているほか、黒斑病、アブラムシの発生が増えています。ハダニ類、リンドウホソハマキの発生は減ってきていますが、依然発生が多い圃場も見られています。

2 台風対策

圃場に水路などからの水が入らないよう土嚢などで対策を行うとともに、排水路の点検を行い、排水しやすいよう整備してください。

強風による折損や倒伏の恐れがありますので、支柱やネットの強度を確認し、補強してください。また、ネット上げが不十分な場合、茎上部が風で折れることがありますので、適宜引き上げてください。

冠水や土砂が流入する等の被害が発生した圃場では、できるだけ速やかに事後対策を実施します。長時間圃場に滞水しないよう速やかに圃場の外へ排水するとともに、倒伏した畦は早めに起こし、通路や畦の上にたまった汚泥はできるだけ取り除きます。また、折損があった茎葉は被害部分を取り除き、病害の発生を抑えるため殺菌剤を散布します。

3 病害虫防除

(1) 花腐菌核病

県中、県北地域では発生が始まっています。花腐菌核病は花卉から感染します。蕾から花卉が見えている品種は花蕾部への防除が必要です。降雨が続く場合は散布間隔を短くし防除してください。また、発病がみられた場合は、菌核ができる前に被害茎を圃場外に持ち出して処分します。

(2) 褐斑病

収穫が終わった圃場などで多発している場合が見受けられます。発生が見られた圃場では、翌年の伝染源を減らすため、被害茎葉を圃場外に持ち出して処分します。

(3) リンドウホソハマキ

発生が続いており、茎への侵入による被害の発生がみられます。また、定植一年目の圃場でも被害が発生しています。残茎葉の折り取りを確実にし、圃場外で処分し、越冬する幼虫を減らしましょう。

(4) ハダニ類

県北部では薬剤が効きにくい越冬成虫の発生が見られています。圃場をよく観察し、越冬成虫がみられた圃場では気門封鎖型の薬剤を利用し防除します。



写真1 定植年のリンドウホソハマキ被害

(5) アブラムシ類・アザミウマ類

開花中～開花後に特に増加します。これらの害虫は、ウイルス病を媒介する恐れがあることから、収穫後の残花部分は確実に折り取り発生を抑えます。極晩生種でも発生が広がるので薬剤散布に努めます。

4 収穫後の管理

- (1) 収穫後の圃場は病虫害防除がおろそかになりがちで、病虫害が多発しやすくなります。翌年の発生原因ともなるので、収穫後も防除を継続してください。
- (2) 収穫後は花の着いた茎の部分を折り取り病虫害防除と株養成を促します。定植年の株でも開花しますので、花はできるだけ摘み取ってください。
- (3) 茎葉の折り取りや刈払いは、ウイルス病などの感染を防ぐため茎葉が完全に枯れてから行います。晩生種や極晩生種は枯れる時期が遅くなりますが、無理な折り取りは株を傷めますので、その場合は春に折り取るようにします。
- (4) 翌春の雑草対策のため、秋のうちから圃場内外の雑草防除を行うことが効果的です。

小ぎく

1 生育概況

9月咲き品種は草丈、ボリュームとも良好な生育となった地域が多く、昨年よりやや早い開花となっています。

病虫害では白さび病、ハダニ類、アブラムシ類の発生がみられています。また、オオタバコガは昨年と比べ少ない傾向ですが、フェロモントラップでの誘殺が続いています。

2 台風対策

りんどうと同様に、圃場に水路などからの水が入らないよう土嚢などで対策を行うとともに、排水路の点検を行い、排水しやすいよう整備してください。また、強風による折損や倒伏の恐れがある場合は、支柱やネットの強度を確認し補強してください。

キクの根は過湿に弱く、多湿条件下では生根腐れ等の障害が発生しやすくなります。冠水した場合は、長時間圃場に滞水しないよう速やかに排水するようにします。また、倒伏した畦は早めに起こし、茎の曲がりを防止します。折損があった茎葉は被害部分を取り除き、病害の発生を抑えるため殺菌剤を散布します。

3 病虫害防除

(1) 白さび病

各地域で発生が多くなっています。品種によって中位葉から上位葉まで発生がみられます。今後も雨が多くなると白さび病の感染が多くなりますので、散布間隔があかないよう薬剤防除してください。また翌年の親株にも伝搬しないよう注意してください。

(2) 害虫

害虫の発生は全体的に減少してきていますが、圃場によってハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類、オオタバコガの発生がみられています。これから収穫になる圃場のほか、翌年の親株の防除を継続します。

4 親株管理

(1) 栽培計画

翌年の栽培に向け、各品種の開花期や特性を整理します。そのうえで品種構成や作付面積を決定し、必要な親株の数量を確保します。

(2) 親株選抜

翌年採穂用の親株は、収穫前の選抜を徹底します。開花期が狙う時期に合っていること、草丈がよく伸び、本来の品種特性を備え揃っていること、葉の枯れ上がりが少ないこと、病虫害に侵されていないこと等を確認して優良な株を選抜します。

(3) 親株の管理

翌年採穂用に選抜した親株には、収穫後、マルチを剥ぎ順次土寄せ、追肥を行って株養成します。茎が伸びてきたら適宜台刈りを行い、伸びすぎないように管理します。

親株のハウスへの伏せ込みは10月下旬～11月上旬頃までに行い、早めに活着させるよう管理します。伏せ込みは、品種や株の充実状態等により適する方法が異なり、また、病害虫の持ち込み程度も異なるので、適した方法で作業を進めてください。

ア 親株の伏せ込み

冬至芽の発生の少ない品種に適し、作業の手間も少なく済みます。しかし、白さび病などの病害を持ち込むことが非常に多くなるので、薬剤散布に注意が必要です。

イ かき芽利用

冬至芽の発生の遅い品種、少ない品種に有効ですが、病害を持ち込みやすく、株での伏せ込みより手間がかかります。

ウ 冬至芽利用

揃いが良くなり病気の持ち込みが少なくなりますが、伏せ込み作業に労力がかかり、冬至芽の発生が少ない品種には利用できません。品種の特性を十分に理解して、それぞれに適した増殖方法を選択してください。

次号は10月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

豊作を 無事故で迎える いわたの農業

中央農業改良普及センター県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。